

地中海古代都市の研究 (107)

メッセネのギムナシオンのストア調査 2000(1) - 遺構の概要

正会員 ○吉武隆一⁴⁾ 伊藤重剛¹⁾ 林田義伸²⁾
武田明純³⁾ 岩淵耕平⁴⁾

1. はじめに

ギリシアの古代都市メッセネは、ペロポネソス半島南西部カラマタの北西約20 kmに位置しており、紀元前369年に建設された。近年、クレタ大学のペトロス・テメリス教授の主催するメッセネ考古学協会が発掘調査を行なっている。熊本大学の調査隊は1997年から建築担当班としてこれに参加しており、ギリシア隊が発掘した建築遺構を実測するというかたちで、共同調査を行ってきた。2000年夏には、スタディオンを取り囲むギムナシオンのストアの遺構を調査したので、本稿では主に遺構の概要について報告する。¹⁾

実測は、トータルステーションを用いてストアのユーティンテリア、内部列柱、後壁に沿って基準線を引き、コンベックス、曲尺を用いて基準線からのオフセット量を測る方法で行い、遺構の平面図を50分の1の縮尺で作成した。また、現場からはストアの多数の部材が出土しており、それらの幾つかを実測し10分の1の縮尺で図面を作成した。

2. ストア遺構の現状

2-1. 概況

現場はメッセネの市域の南端に位置し、浅い谷を利用して南北方向にスタディオスが造られており、それを東、北、西の三方から取り囲むようにコの字型のドリ式ストアが建設されている。3つのストアのうち、北ストアだけは外部と内部の2列の列柱、東、西ストアは外部列柱だけをもっている。現在確認出来る外部列柱のスタイロベートの長さは、ほぼ全体が残る北ストアが81.847 m、南側が失われている東ストアと西ストアで、各々約65 m、および49 mが確認出来る。(図1)

各々のストアは、北ストアと東ストアがスタイロベート上で92° 31' 16"、北ストアと西ストアが94° 41' 52"の角度をなしており、90度よりもわずかに開いている。全体でコの字型をしているストアがなぜ微妙な角度で開いているかは、恐らく周辺の街路に

沿わせた結果と思われるが、周辺が未発掘なので、まだよく分からない。使用されている石材は、地元産と思われる柔らかい石灰岩で風化が目立つ。年代については、まだ研究途中ではっきりしないが、テメリス教授によると紀元前3世紀頃とされる。²⁾

2-2. 北ストア

北ストアは、中央付近が小川で破壊され、また現在の発掘用道路の下になっており、中央の約10 mほどが不明であるが、他のストアよりも残存状態は良い。スタイロベートの長さ81.847 m、奥行きは4箇所での平均が外部列柱スタイロベート外側から、内部列柱の中心まで5.108 m、後壁の内側まで9.583 mである。スタイロベートの外側に沿って幅0.64 mの排水溝があり、溝の幅0.48 m、深さ0.09 mである。また排水溝には5個の楕円形の沈殿槽が、約19 mの間隔で配置されている。

外部列柱は柱頭こそ失われているものの30本の円柱が今なお立っており、7本分は設置痕のみ確認される。中央部の失われた部分ないし道路で覆われた部分には、柱間寸法から7本が立っていたものと推定され、北ストアの隅から隅まで全体で合計44本の外部列柱が立っていたと推定される。内部列柱は四角形の独立基礎の上に立っており、現在21本が確認されている。失われた中央部の3本を含め、本来は24本立っていたと推定される。³⁾ 内部列柱は外部列柱の1本おきに位置しており、柱間は外部列柱の2倍である。(写真2)

北ストアの円柱で、柱頭まで完全に残っているものはない。フルーティングは16本彫られているものの非常に浅く、殆ど16角柱に近い。円柱のサイズは以下のとおりである。

	データ数	平均(m)	最大	最小
外部柱下部直径	29	0.525	0.548	0.513
同 標準柱間	31	1.918	1.941	1.901

データにばらつきがあるが、これは石材の風化によ

1) 熊本大学助教授・工博 2) 都城高専教授・博(工) 3) 熊本大学大学院博士後期課程 4) 熊本大学大学院博士前期課程



写真1 西ストアとアクロポリス (イトメ山)

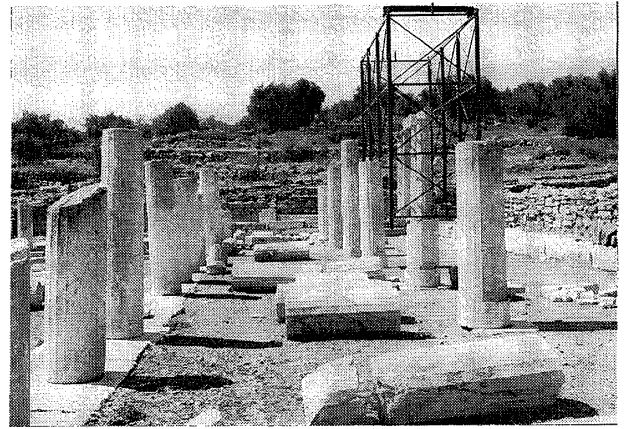


写真2 北ストア



写真3 東ストアと倒れた外部列柱

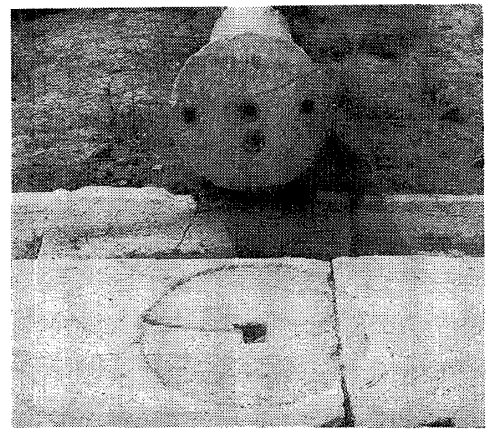


写真4 東ストアの円柱設置痕と円柱

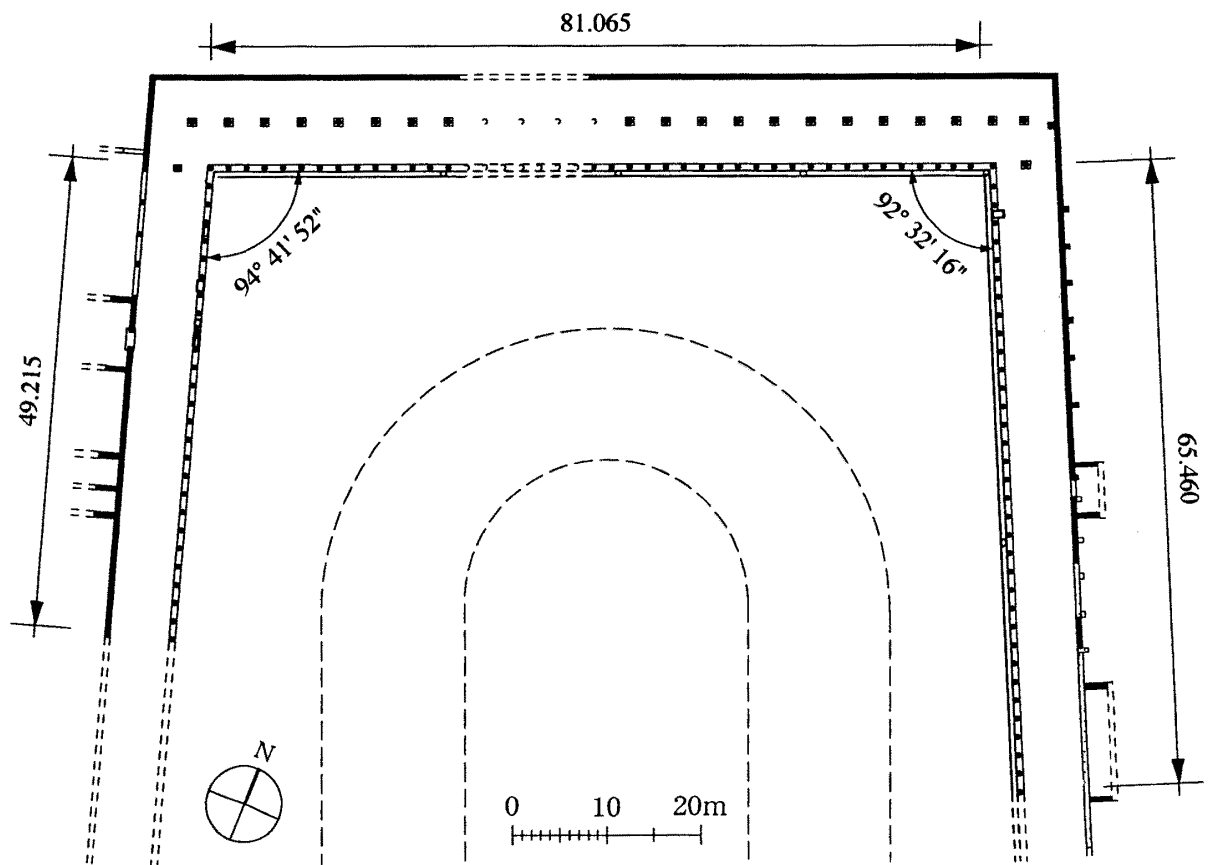


図1 ストア復元平面図

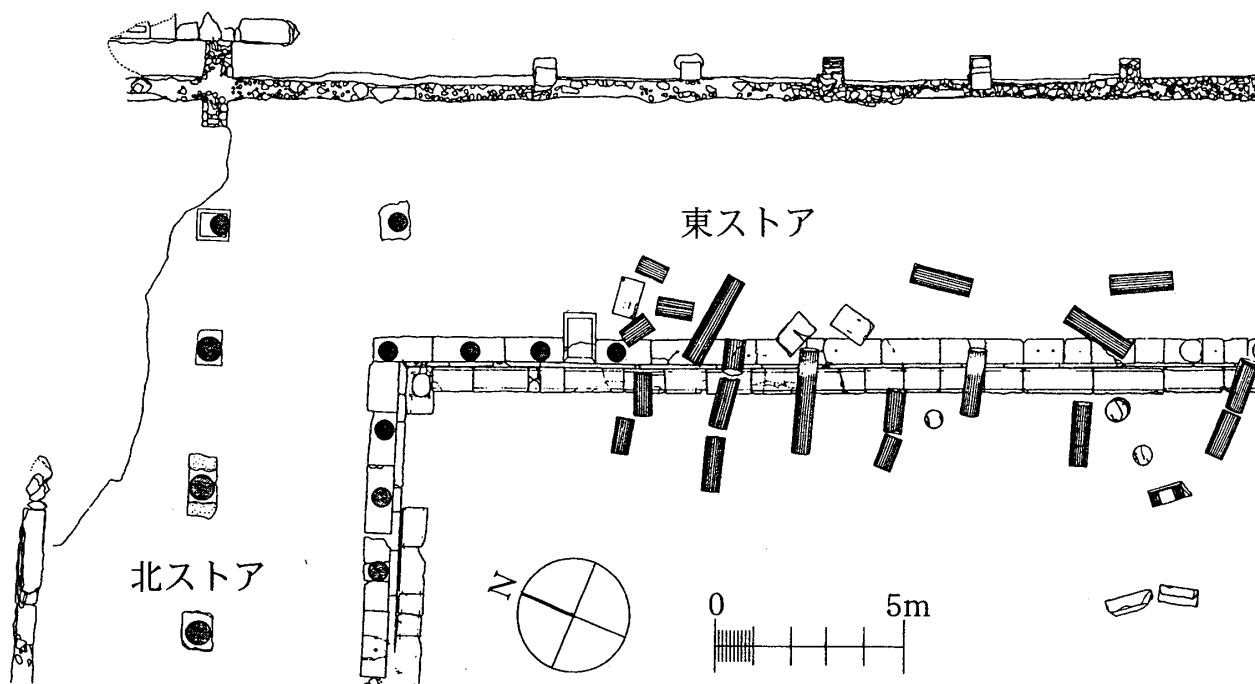


図2 東ストア北東隅現況平面図

るものと思われる。外部柱は柱頭も含め、2個から4個程度の部材で構成されたと思われる。現在立っている円柱で最も高いものが3.55 m、最も低いものが1.30 mである。内部柱についても同様で、現在立っている柱の最も高いものが3.60 m、最も低いものが1.26 mである。

外部柱の43柱間のうち、東隅の柱間は2.070 mで2番目の柱間は1.777 mである。他の柱間、つまり標準柱間は平均で1.918 mで、西端の柱間もこれらと大きな差は見られない。しかし、東隅の2柱間とは標準柱間とは顕著な違いが見られ、しかも2つの柱間の合計は、標準柱間の2つ分と等しい。これはいわゆる「隅の柱間の延長」が行われ、その分2番目の柱間を短縮したものと思われる。⁴⁾ また内部柱については、まだ実測データをとっていないが、最北端の内部柱だけは他より細くなっている。

北ストアの壁は、全体にわたって約1 mから1.5 mほどの高さで残っている。大部分は横長の切石部材が整層積みに積まれているが、上部はローマ時代の乱石積（オプスインケルトゥム）で積まれていたりしており、後の時代の改変が著しく、ヘレニズム時代のオリジナル部分と改築部分を区別するのが非常に難しい。

2-3. 東ストア

東ストアの円柱は、ストアの西側に大半が列をなして倒れており、出土状態が目される。(写真3) 特に列柱の内、21本目から31本目にかけては、円柱からコーニスまで一体となって倒れているので、恐らく地震の時、東西方向の水平力を受けて同時に倒壊したものと思われる。円柱が立っているのは、北側の4本のみである。後壁の背後に複数の部屋が確認されるが、完全に発掘されておらず詳細は不明である。(図2)

東ストアは南方に長く伸びており、残存するスタイロバート長さ65.46 mで、全体の長さがどれほどだったかはまだ不明である。奥行きはスタイロバートの外側から後壁の内側まで、3箇所平均7.005 m、壁厚は約0.600 mである。スタイロバート上には、深いもので約1 cmほど彫り窪めた円柱の設置痕が残っている。設置痕は、二つ重なったものがあったり、だぼ穴が1個のものと2個のものがあったり、さらには円柱底部のだぼ穴の数とそれに対応する設置痕のだぼ穴の数が一致しないものさえあり、スタイロバートの石材が再利用されている事を示唆している。(写真4) ユーティンテリア下の基礎は、比較的小さめの石を浅く敷いたもので、必ずしも頑丈な基礎というわけではない。スタイロバートの外側に沿って北ストア同様に排水溝があり、北東隅のものを含め2個の沈殿槽が残っている。

柱の直径と柱間は以下のとおりである。

	データ数	平均(m)	最大	最小
下部直径	28	0.527	0.543	0.504
標準柱間	33	1.925	1.992	1.858

北端の柱間は2.128 mと標準柱間より20 cmほど広く、北ストアと同様「隅の柱間の延長」が意図的に行われているのは明らかである。

後壁は北端付近が約2.5mほどの高さで切石積みの壁が残っているものの、南に行くにつれて残存状況は悪くなる。上部はローマ時代以降の乱石積み（オプスインケルトゥム）となり、約4mおきに幾つかの控え壁が付けられている。しかし、北端から50m付近より南にはこれらの壁もなく、基礎部分しか残っていない。壁には何期かに亘って改変が行われた痕跡はあるものの、これらの改変の次期や順序などは明確には分からない。東ストア中央部の後壁の東側に沿って、大小数室の部屋が確認された。特に北端から60mないし70mにかけての付近には、間口約5m、幅11.5m奥行き6.5mで、切石の敷居と壁で囲まれたしっかりした部屋が確認され、恐らく何らかの重要な部屋であったと思われる。

2-4. 西ストア

西ストアは、外部列柱と後壁からなる列柱廊で、後壁はアゴラから南に下る主要街路に沿って建てられていた。（写真1）現在、外部列柱のスタイロベートは49.22mが残存している。ストアの奥行きは、スタイロベート外側から壁の内側まで、5箇所の平均で6.88mである。

基礎は東ストアと同様、小さめの石を浅く敷いた比較的簡単なものである。ドリス式の列柱は隅柱を含めて24本の円柱の下部がそのまま立っている。西ストアの北端のスタイロベートは、北ストアのスタイロベートに側面からそのまま単純に接合されており、西ストアは北ストアよりも後の時代にこれに接合する形で増築されたものと思われる。このことは、北ストアのスタイロベートが入り隅の柱のさらに西側の一部まで続き、円柱までもが1本立ったまま残っていることから推測がつく。西ストアでは幾つかの柱間に、彫刻などが置かれた碑文入りの台座が置かれ、その幾つかはスタイロベートではなくユーティンテリアに直接置か

れており、当初から外部列柱に組み込む形で設置されている。排水溝がない点が、北ストアや東ストアと異なっている。外部柱の寸法は以下のとおりである。

	データ数	平均(m)	最大	最小
下部直径	31	0.515	0.531	0.498
標準柱間	26	1.925	1.972	1.820

後壁は、一部に当初のものと思われる切石のオルソスタットが残っているものの、大半はローマ時代のオプスインケルトゥムの壁となっている。後壁の内側には、本来はプロピロンから南へと続く街路を占拠するような形で、三つの部屋が作られている。

3. まとめ

メッセネのギムナシオンのストアは、スタディオンを中心に、これと一体となった左右対称で軸線的な平面計画をもっている。典型的なヘレニズム時代の特徴だが、これほど明確なギムナシオンの平面は他に類例がない。調査はまだ途中であり、最終結論にはならないが、東ストアから北ストア、西ストアへとL字型、コの字型へと、少なくとも三期か四期の段階を経て発展したと推定される。2001年の調査では、残りの部材、壁の立面の調査をする予定で、これによりさらに新しい知見が得られると思われる。

謝辞 本研究は平成12年度の文部省科学研究費補助金基盤研究(A)(2) 海外学術調査（課題番号11691154）の助成を得た。

注

- 1) ギムナシオンのストアの発掘に関しては、ギリシア考古学協会の年報を参照。Themelis, P. "Excavation of Messene", *Praktika*, 1992, pp.61-74; 1995, pp.68-74; 1996, pp.157-165; 1997, pp.93-108.
- 2) P. Themelis, "Die Statuenfunde aus dem Gymnasion von Messene", *Nuemberger Blaetter zur Archaeologie*, heft 15, 1998/99, pp.62-63.
- 3) 北ストアの両端にある円柱の心々距離を北ストアの標準柱間寸法1.918mが、北ストアの両端にある円柱の心々距離を43で除した値1.918mと一致するので、柱間数43、柱数を44本と判断できる。
- 4) この点の詳細については、林田による次稿を参照。